

令和7年度 あおもり未来のグローバル人材応援事業  
高校生海外フィールドワークチャレンジ2025

探究テーマ

フィンランドに学ぶ青森県の未来  
—自立と個性を育む学びと安心できる居場所づくり—  
報告書

令和8年3月

青森県立北斗高等学校 定時制の課程

チーム 北斗七星

# 1 研修先

フィンランド（ヘルシンキ）

# 2 研修目的

人口減少が喫緊の課題である青森県において、子どもたちにとっての「自立と個性をはぐくむ学び」の推進や「安全な居場所づくり」を拡充すること、「生徒自治の活性化」に向けて示唆を得ること、自身のこれからのあり方や生き方について具体的に考え行動することを目的とする。

# 3 研修日程

2025年10月25日（土）か11月1日（土）の5泊8日の日程で、フィンランド（ヘルシンキ）の学校や公共機関を訪問し、調査を実施した。日程については次のとおりである。

日時	予定	宿泊
10月25日（土）	移動 青森空港→羽田空港→ヴァンター空港	機内泊
10月26日（日）	ヴァンター空港到着→ヘルシンキ中央駅 街歩き&若者との懇談	ホテル泊
10月27日（月）	フィンランド社会について学習 一般家庭への訪問	ホテル泊
10月28日（火）	職業学校訪問 街頭インタビュー	ホテル泊
10月29日（水）	高等学校訪問、インタビュー調査	ホテル泊
10月30日（木）	小中一貫校訪問 ユースセンター訪問	ホテル泊
10月31日（金）	午前：街散策 午後：ヴァンター空港	機内泊
11月1日（土）	移動 羽田空港→青森空港到着	

フィンランドは、日本との時差が7時間、幸福度ランキングで世界第1位、国の75%が森に囲まれている。湖も多く、自然が豊かな国である。サウナの発祥地でもあり、たいていの自宅にサウナがあるそうだ。また、サンタクロースの故郷でもある。性格は控え目な人が多く、どこか日本人に似ているようだ。

## 4 事前学習

今回、「自立した学び」「居場所づくり」「生徒自治」をキーワードに、事前学習を実施した。

なお、6名のメンバーは、それぞれ所属部が異なることやアルバイトの都合等もあるため、全員が一同に会する機会は限定された。限られた時間での活動ではあったが、分担したりオンラインで打ち合わせを行ったりするなどし、探究活動を進めた。事前に行った活動については、次のとおりである。

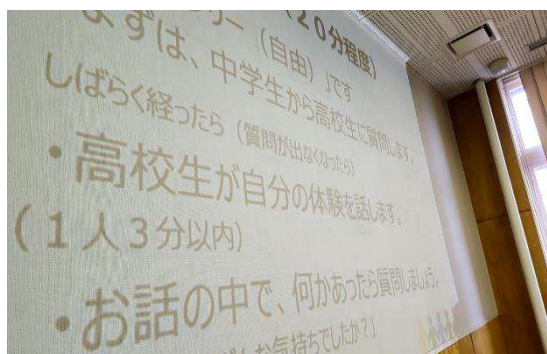
### (1) 教育支援センター訪問

6月19日(木)青森市内にあるA中学校を訪問し、中学生2名と交流学习を行った。訪問したA中学校は、令和7年4月から不登校等特認校として位置付け、校内教育支援センターで取り組みを開始した。これは、青森市内の小学校3校、中学校3校において、「不登校児童生徒等の多様な学びの場を保証する取組」として、市内全域から入学・転学(転校)できるようにするものである。また、6校の校内支援センターでは、学習支援や教育相談のほか、特色のある教育活動として未来創造学習(総合的な学習の時間)を実施し、児童生徒一人一人が自己実現を果たせるよう、市適応指導教室「フレンドリールームあおいもり」も連携して支援の充実を図っている。

今回、当時の自分たちと同じような思いをもち過ごしている中学生へ自分たちの経験を伝えたりサタデースクールの案内をしたりすることを目的に訪問した。

交流した中学生からは、「いろいろな遊びをして楽しかった」「北斗高校のみなさんとの仲を深めることもできたのでまたやりたい」「高校生がやさしく接してくださり(サタデースクールに)もっと行きたいと思えた」などの感想が寄せられた。

参加した高校生からは「中学の時にこのような活動があったらよかったなと思



い、今後もぜひ参加して少しでも助けになりたい」「好きなものを知ることができ、今後も話してみたいと思った。北斗高校のよいところをたくさん伝えることができた」などの感想が挙げられた。今後も、活動していきたい。

## (2) 北斗サタデースクール・サタデーフォーラムの取り組み

### サタデースクール (サタスク) 年2回・土曜日実施



- 不登校状況にある中学生とその保護者との交流・相談
- 運動、ボードゲーム等、デザイン活動等をとおして交流
- 12月にはサタデーフォーラム(講演)を開催

不登校または不登校傾向にある中学生の居場所の提供と支援を目的に、本校生徒と中学生がスポーツやゲームなどの活動をとおして交流を深める行事である。その事後研修「北斗サタデーフォーラム」では、不登校を経験した本校生徒や卒業生の体験発表と座談会を開催している。その企画・運営等において、生徒が自発的に役割を担うことで、自己有用感や自己肯定感を高めている。本校生徒が、参加中学生の応援団・伴走者の役割を果たすことで、相互に持続可能な青森県を創造できる人財への変容を期待しているところである。

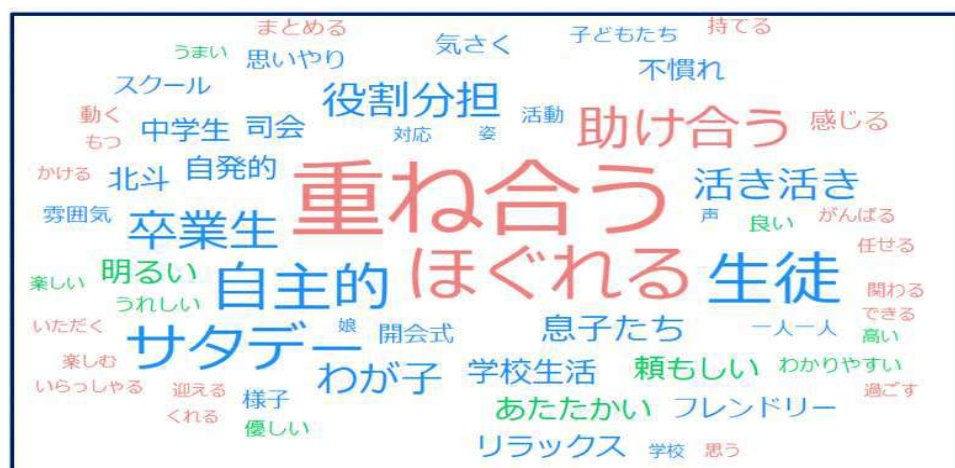
今年度は、7月5日(土)本校を会場に、令和7年度第1回北斗サタデースク



ールを開催し、チームメンバーも運営側として参加した。

参加者からは、「高校生が優しく声をかけてくれて緊張がほぐれた」「現役の北斗高校生徒の体験談を聞いて参考になった」「みんな優しくて楽しかった」など、多くの感想が寄せられた。

### 中学生、保護者等の感想 テキストマイニング結果



#### (3) とうほくT2さみっとへの参加

本さみっとは、東北地区の定時制・通信制高校に在籍する代表生徒が一同に会し、学校の枠を超えて互いの理解を深め、友情をはぐくむことや交流を通じて、自分自身を見つめ直し、他者の考えや価値観に触れることで、視野を広げる機会を目的としている。

東北地区の定時制・通信制に在籍する生徒及び教員を対象とし、岩手県立社陵高校を会場に、8月4日（月）～5日（火）の1泊2日の日程で行われた。東北地区の各校へ参加周知し、各県から38名の参加があった。本校からはチームメンバー3名と教員1名が参加した。日程は、以下に記載のとおりである。

第1日目 8月4日（月）

12：30～ 受付

13：00～14：30 セッションⅠ『学校間交流Ⅰ（ワークショップ）』

14：45～16：15 セッションⅡ『DX体験講座』

講師 株式会社ギャルドブレイン

代表取締役 中坪 久人 氏

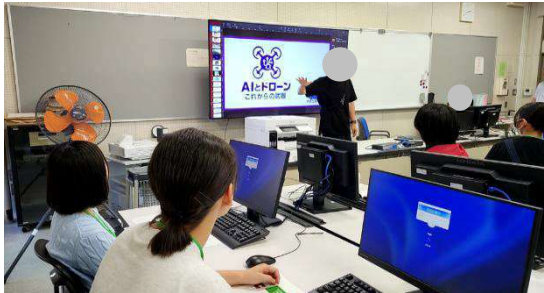
17:00～18:30 夕食・お楽しみ企画

第2日目 8月5日(火)

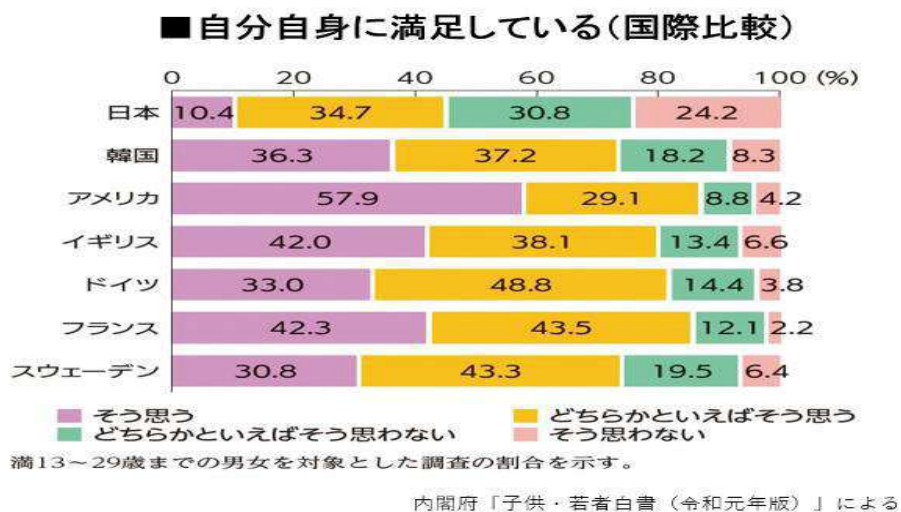
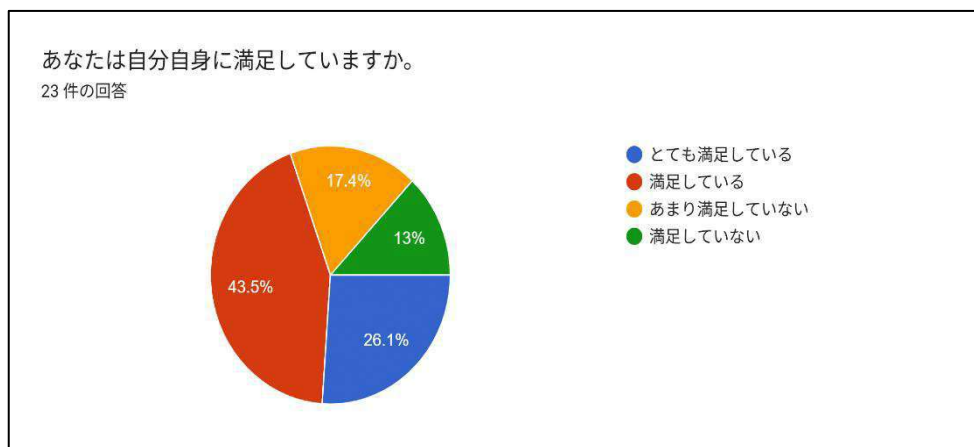
9:00～10:30 セッションⅢ『生成AIの活用体験』

10:45～12:15 セッションⅣ『学校間交流Ⅱ(カフェスタイル)』

12:15～12:30 クロージング・セレモニ



参加者を対象に、アンケート調査を実施したところ、23件の回答を得た。



本アンケート結果では、「とても満足している」と「満足している」を合計した数値は約70%であり、国際比較の約45%を大きく上回る結果となった。

回答した生徒に理由を聞くと、「中学校の頃よりも今がとてもよい」「定時制に入学し、安心して生活できている」「高校生になって、気の合う友達がいる」「体調がすぐれないことがあるが、通信制に入学し自分のペースで学んでいる」などのこれまでの自分と比較して、「今がよりよいから」といった思いがあることが確認された。このことから、「自分に合った環境」が重要であると感じた。

参加したメンバーの所感を一部掲載する。

- ・各県の定時制・通信制の特色がそれぞれあり、新しいことを知れる機会となった。校則の自由度の高い学校も多く、自律につながると実感した。また、通信制の課程で学ぶ生徒と交流し、自分で学習を進めることのできる自立心の強さに気がついた。

参加者との交流をとおして、個々にこれまでの登校状況や心や体の状態などがそれぞれ違うが、高校の新たな環境に飛び込み、困難を乗り越えて元気になったり人とうまく付き合えるようになったりしたエピソードに鼓舞され、これからの過ごし方について考えさせられた。

- ・私は、プレゼンテーション、生活体験発表が立て続けにあり、今まで苦手だった人前での発表が好きになった。プレゼンテーションをしてから一気に殻を破れたような気がしている。このことは大きく、チームメイトが関わっているだろう。積極的で発言力の大きいメンバーがたくさんいるので触発された。また、初めて他校の生徒とふれあい、触発される部分が多くあった。相手の立場になって親切に教えるを説いてくれたり、声をかけてくれたりするところに「こうするといいんだ」と気づくことができた。今回の学びを今後のサタスクの活動やフィンランドでのフィールドワークに生かしていきたい。

- ・年齢差も関係なく、地域の壁を超えて多くの人と話をすることができた。そして、定時制・通信制で学ぶ、同年代の仲間とつながることができた。不登校時代のことや学校のことなど、思い切って踏み込んだ悩みや経験を共有でき、いい機会となった。この経験を活かし、今後も取り組んでいきたい。

#### (4) 研修会での話題提供

9月27日(土)に弘前大学で行われたNITS弘前大学センター「インクルーシブな学びの場を考えるセミナー2025」へメンバー1名が話題提供者として参加した。

学習者の立場から「これまでの学校生活について」や「学校という場に対して感じていること」を中心に意見を述べた。また、石川県加賀市教育委員会の事務局局長である小林湧氏からは、「個別最適な学びと協働的な学びを実現するための伴走型支援ー学びを変える加賀市の BE THE PLAYER の取組からー」をテーマに提言があった。

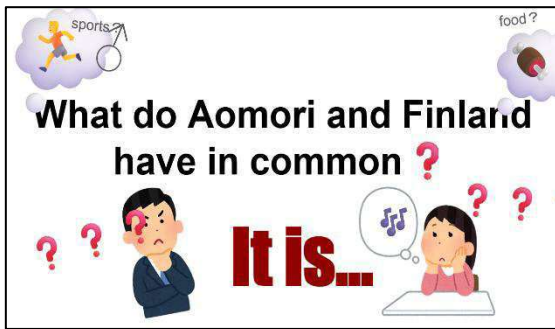
話題提供者として参加したメンバーからは、「緊張したけれど、自分の経験を伝えることができてよかった」「改めて、学校の教育環境について考えさせられた」という感想が挙げられた。

参加者からは、「明るい教室、学校を作りたいと強く思った」「自分も不登校当事者として聞かせていただいた。不登校になった経緯は違いますが、高校生の段階で経験を還元する気持ちになっていることは素敵だと思った」「教師と子どもが話し合うことの大切さを感じた」「学習者の声をもっと大切だと思った。生徒に心理的安全性を保障できる教師になりたい」といった感想が寄せられた。



#### (5) 有識者とのオンライン学習

10月9日(木)エコ・コンシヤス・ジャパン合同会社代表の戸沼如恵氏を講師に、渡欧前の事前オリエンテーションをオンラインで行った。学習内容は、①フィンランドの概要と訪問先について、②高校での英語プレゼンテーションの練習を行った。戸沼氏とのオリエンテーションを終え、現地での活動に見通しをもつことができた。また、初めての海外ということもあり、不安が多かったが、たくさんの情報を得ることができた。



## 5 現地フィールドワーク

### (1) 一般家庭への訪問

訪問した目的は、家庭の教育方法や雰囲気のポイントがあるのではないかと  
いう問いがあり、今回訪問することとした。活動内容は、①シナモンロールづく  
りを通じた家庭体験、②対話である。

自然あふれる森の中にあるご自宅は、木が多く使われており、暖かみのあるデ  
ザインで落ち着いた雰囲気だった。また、ご自宅にはサウナが2個あった。

話をする中で感じたことは、ご夫婦の関係性についてである。お2人は似ている  
部分が多く、時には喧嘩もするそうだが、お互いを受け入れ合う素敵な関係だっ  
た。こうした関係性が子育てにもいい影響を与えていると捉えた。

育児でいちばん大変だったこととして、お子さんの話が挙げられた。お子さん  
の成績は良かったものの、不登校になった時期があったそうだ。その後は夜間の  
高校を卒業し、海外に行くこととした。海外では、数年間うまくいかないことが  
あり、働くまでに時間がかかったそうだが、ご家庭は「本人の人生だから」と見  
守ることを大切にしていたそうだ。

最後に、今のフィンランドに思うことを教えていただいた。スマホの普及によ  
って生活はとても便利になったが、その分家族で会話する時間が減り、親と子ど  
もの間に温度差が生まれやすくなっていると感じているそうだ。また、子どもた  
ちが本を読む時間が減っていることを、少し寂しく思っているとも話していた。



便利さと家族のつながりのバランスが課題として挙げられた。



## (2) 総合学校（小中一貫校）

B 総合学校では、学校生活の様子を観察や教育制度について、中学生の生徒と対話をした。

B 総合学校は、2004年に設立し、就学前教育から小中学校までの子どもたちが約600名在籍している。敷地内には、保育園も併設している。インテグレーション（統合）を大切にしている学校であり、一般のクラス、少人数制のクラス、特別支援クラスがある。校内には、くつろげる空間があり、友達同士で遊んだり、座って話をしたりしている様子が印象的だった。

### 見学と交流の様子

校舎内の見学でとても印象に残っていることは「学びの環境」についてである。見学した教室の中でそれぞれが課題に取り組んでいるクラスがあった。ここでは、教室で取り組む生徒や集中するために教室ではなく廊下で取り組む生徒、教室内でも机の向きを正面ではなく横や後ろにしたり、机の位置を窓の近くに変えたりして取り組んでいた。そして教室内には、休憩のスペースがあり、授業中に少し疲れた時や落ち着かない時に、生徒がクールダウンするためのスペースが設けられていた。一人一人が集中して、そして安心して勉強ができるようにするために、このような環境にしているようだ。他にも安心して勉強に取り組むために、職員室や校長室などの教師がいる部屋のドアを開けておく工夫をしていた。また、生徒が出入りして教師とお話をしたり一緒にお菓子を食べたりして距離を縮めて、より信頼関係を築けるようにした環境づくりが印象的であった。また、先生以外の専門家が配置され、スクールカウンセラーをはじめ、サイコロジストという相談員を配置している。サイコロジストは、学校で生徒とより多くの時間を過ごしており、日常の小さな悩みを気軽に

<b>《学ぶための環境》</b>	
学びやすい方法で取り組む	休憩・クールダウンする
	
▶一人一人が集中・安心して勉強ができる環境を	
<b>生徒との距離を縮める為に</b>	部屋が透明のガラス張り いるかないがすぐ分かる
職員室や校長室などのドアを 開けておく	
<b>サイコロジスト</b>	
SCの他により生徒との距離が近い相談員 ⇨悩みが小さい時から相談できる	

相談できるようにしたりしているそうだ。

次に進路指導の先生から進路選択についてお話をお聞きした。フィンランドでは自分について知るということを幼い頃からとても大切にしており、進路を明確にするために中学1年生にあたる7年生の時期より、何が得意で何に興味があるのかをより深掘りする。8年生（中学2年生）では職業や学校について調べてなりたいたいのをより具体的にしていき、なりたいたいのによって選択する科目が変わる。そして9年生（中学3年生）で進路を決めるというお話を聞いて自分を知ることの大切さや自分を理解しているからこそ最後の決断を誰かに委ねるのではなく自分であることができるのだと再確認した。

最後に、この学校で取り組んでいるサポートスチューデントという活動について紹介された。これは「生徒が生徒」を、「上級生が下級生」をサポートする活動である。活動内容は、入学したばかりの生徒が迷子にならないように教室まで案内したり、孤立している生徒に声をかけたり、みんなが楽しめるイベントを企画するなどをしているそうだ。

このサポートスチューデントの取り組みは生徒が学校をより良い雰囲気にしたいたいという生徒の思いが根底にあり、生徒による自治活動が活発に行われていることが確認できた。

《進路選択》	《生徒の活動》
<p><b>7年生:</b> 自分を知る「自分探し」 ⇒何が好き？何に興味がある？</p> <p><b>8年生:</b> 職業や学校について調べる ⇒なりたいたいのによって取る科目が変わる</p> <p><b>9年生:</b> 進路を決める ⇒60%が高校、職業学校に進学</p> <p>最終的な決断を自分でする為にも「自分探し」が大切</p>	<p><b>サポートスチューデント</b></p> <p>▶生徒が生徒を自主的に支援</p> <p>▶上級生が下級生をサポート</p> <p>⇒新1年生が迷子にならないように教室へ案内</p> <p>⇒1人でいる子に話しかける</p>

### （3）高等学校

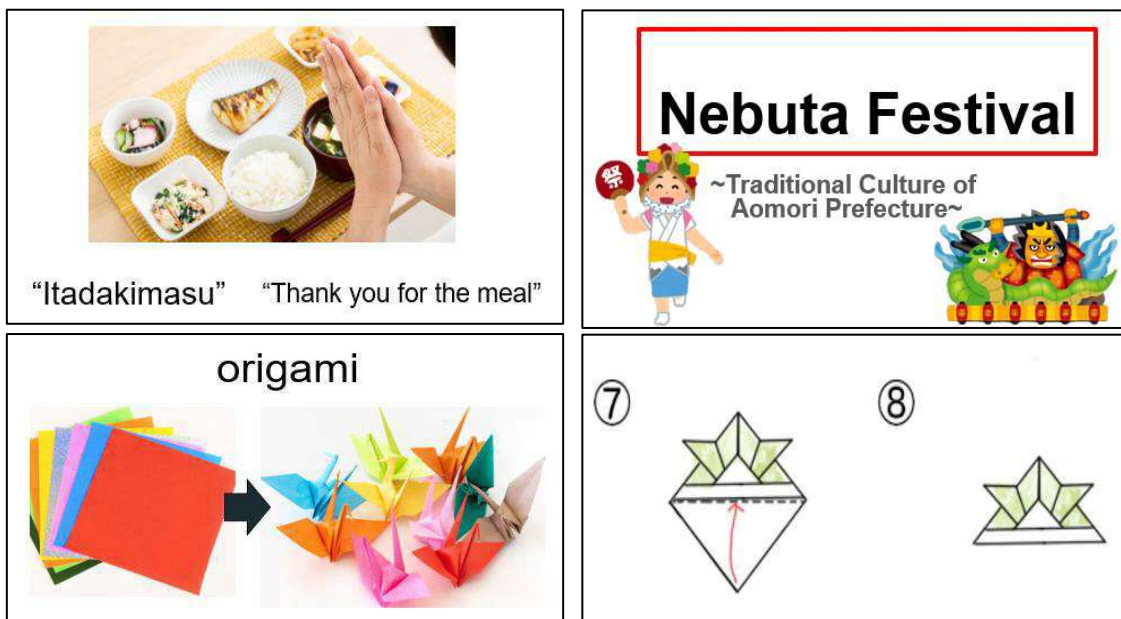
今回訪問したC高等学校は、単位制で、各生徒が科目を選択し、卒業に必要な単位取得を目指す。大きな特徴は3つあり、「スポーツと学びの両立」、「高い国際性」、「遠隔教育・オンライン授業」である。また、取り組みの特徴として、Erasmus+（エラスミス・プラス）とEtalukio（エタルキオ）が挙げられる。

まず、Erasmus+というのはEUが提供する教育、訓練、青少年、スポーツを支援する国際交換留学・助成プログラム（2021年～2027年を対象）である。留学をしたり、他国の学校とチームを組み共通のテーマについてオンラインで話し

合いながら学習したりすることができる。また、Erasmus の認定校であるため、他国の高校生が C 高等学校を訪れることもある。留学などにかかる費用は、ほとんど EU が負担し、「子どもたちの教育をよりよくするために」という国の教育体制に驚いた。

次に Etalukio は日本の言葉でいうとオンライン高校、遠隔学習コースという意味合いである。未修了の科目や単位のみをオンライン学習で取得することができるので通常の授業と並行して利用できることと、C 高等学校の生徒ではない他校の生徒も利用できるというのが大きな特徴であり魅力でもあるようだ。このシステムは引越しやスポーツ活動、個人の事情で登校が難しい生徒のために設けられたシステムであり、「いつでもどこでも学べる環境」が整備されているとのことだった。このような制度が青森県にもあれば、病気の事情で思うように学校へ通学するのが困難な場合や居住地等の地理的制限を超えて、やりたいことを学べるのだと感じた。

#### 交流・アンバサダー活動



英語の授業の時間をいただき、日本の文化や祭りの紹介、ねぶた祭の跳人体験、折り紙体験を行った。高校生からは、「はじめての折り紙を楽しめた」「日本の文化に触れる機会となりよかった」といった感想が寄せられた。改めて日本や青森のよさに気づく機会となった。また、英語力の向上を目指したいと強く思った。



#### (4) 職業学校

職業学校では、日本でいう専門学校のようなことを高校生の段階から行っていた。フィンランドの教育システムを中心に説明を受けた。フィンランドはトゥバの実施校である。トゥバとは、移民のための学習の場で、じっくり学ぶためのフィンランドの教育制度の一つであり、ほぼ全ての自治体で実施している。自分が将来何をしたいのか、自分は何が好きなのかなど自分をよく知るための準備教育の場である。

中学卒業後、高校に進学したり、職業学校に進学したりする人もいるがトゥバに通い、自己理解を深めてから通う人もいるそうだ。このような制度があれば、生徒本人にとっても先生にとってもよいのではと感じた。また、高校生のうちに164ある資格の取得にチャレンジすることができるのも特徴的である。資格は、農業系やサービス業系、福祉系などがあり、10分野に分類される。

##### 164の資格の分類一覧

164の資格の分類一覧	
分野	
1	農業・林業
2	ビジネス・管理・法律
3	教育
4	健康・福祉
5	人文・芸術
6	情報・通信技術
7	自然科学
8	サービス業
9	社会科学
10	技術

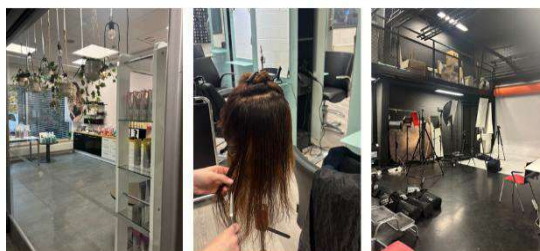
自分の将来なりたい仕事によって資格を取れるが、二重資格制度もあり、職業学校に通いながら、一部の科目を普通高校の科目に代えて履修することもできるそうだ。中学校卒業時点で進路の方向性は2つに分かれるが、入学して、やっぱり違ったかもしれないという場合も大学入試資格と基礎職業資格の2つを取得できる。卒業までには、3～4年を要するが、進路選択の幅を広げられるため、人気が徐々に高まっているようだ。これは非常によい制度であると捉えた。

### 実技(職業資格)+理論(大学入学資格)

ダブル取得

→若い世代が柔軟なキャリアパスを描ける仕組み

### 学びの環境 164の職業資格があり、挑戦できる



### (5) ユースセンター

ユースセンターは、若者の居場所として各地に設置されている公共の施設である。

フィンランドでは、30歳以下の若者を対象に開放している。見学したDユースセンターは4年生(10歳)から18歳までの若者が

利用できるそうだ。このユースセンターの設置は、法律で決められていて、国内各所にある。無料で利用でき、放課後や仕事が終わった後にも利用できるのも多くの若者が利用している。実際に行ってみてフィンランドならではの特徴があった。

1つ目は施設内でできることが多いことだ。ユースセンターで何ができるかというと、宿題をしたり職員の方や友達との会話をしたりなど、ここまでは日本の学童などでもできることだと思う。しかし、私たちが見てきた光景は、学童とは大きく異なり、「思い切り運動ができる体育館」、「たくさんの楽器が置いてあり演奏ができる音楽室」、「種類豊富なボードゲームやテレビゲーム」などがあつた。とても魅力的だと思った。実際に現地の子供達の中に部活が苦手でもここなら気軽に運動ができるという方がいた。様々な事を経験することで自分の好き

### 運営目的

- ①若者の主体性の育成
- ②第3の居場所(安全な場所)の提供
- ③若者のサポート
- ④社会とのつながり

なことが見つかり、将来の進路や生き方を考えるきっかけになると考える。

### 音楽スタジオ



### 体育館



2つ目は、職員の方が各学校に行き、生徒と会話の機会を設定していることである。入学して不安のある7年生（中学1年生）のサポートや、ウェルビーイングの授業をしているそうだ。そこでは自分や友達のいいところ、感情などの自己管理のこと、将来のことを考える時間を作っている。他にもいじめなどのニーズにあったワークショップの提案などもしているそうだ。見学時は、仲間と楽しそうに遊んでいる様子が印象的だった。また、職員の方が、お兄さんお姉さんのような立ち位置で、優しく包み込むように接していたことに感激した。

今回、ユースセンターで感じたことは、「大人と若者の距離感」である。なんでも気軽に、相談できる距離感がとてもいいなと思った。特に職員の方が、ここで何をしたいかななどを子どもたちにしっかり聞いて対応していた。フィンランド滞在中に常々思ったのは、「大人が子供の意思表示を大切にしている」ことである。幼少期から自分の頭で考えてそれを伝える事が当たり前なことを教育し、大人が行動しているのに驚いた。職員の方は寄り添いながら話すことを意識しており、それが居心地の良さに繋がっているのだと思う。このように職員の方が大切にしていることがたくさんある。

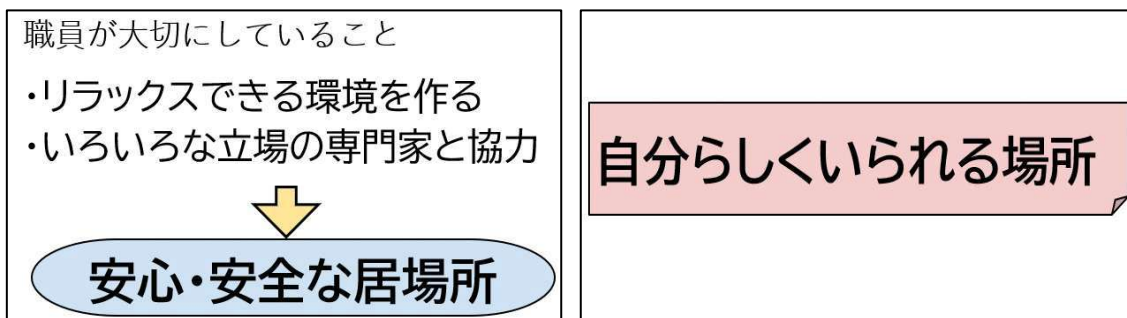
まずは「リラックスできる環境を作る」ことである。リラックスすることはフィンランド全体で大事にしていることでもあり、ユースセンターでも、またここに来てリフレッシュできるような環境を工夫しているそうだ。

次に、さまざまな立場の専門家との協力である。様々な課題が学校や日常であると思う。そのような課題を専門家の方と協力し合い、積極的に解決に向けて行動しているそうだ。いろいろな支援があるからこそ安心・安全な居場所になっていることがわかった。

今回訪問し、ユースセンターにぴったりだと思ったキーワードがある。それは、「自分らしく居られる場所」である。自分らしく居られる場所って意外と少

ないと思われる。しかし、ユースセンターは趣味に没頭できる時間や友達、職員の方との有意義な時間など若者にとって自宅よりも居心地がいいのかもしれない場所である。これほど魅力的な施設や雰囲気は、日本の若者も求めている環境かもしれないと思った。

フィンランドのこのような国全体での若者が自分らしくいられる環境づくりを是非、あおもりの地域にも導入させられたらなと考える。



## 6 事後学習・エバンジェリスト活動

帰国後は、学びを地域に還元することを目指し、フィールドワークでの学びや居場所づくりについて各所で報告した。



### (1) サタデーフォーラムでの報告

12月21日(土)、本校を会場にサタデーフォーラムを開催した。中学生とその保護者をはじめ、教育関係者等を含め約50名が参加した。

第1部では、本フィールドワークの報告(30分間)を行った。第2部では、座談会形式で、数名の本校生徒が不登校の経験を語った。

参加者からは、「フィンランド研修に参加した生徒、生活体験発表をした生徒、フォーラムの運営ボランティア生徒、それぞれが過去から立ち直り、自分のできることを精一杯行って活躍している姿にパワーを貰えた」「発表されていた想いを汲み取って、新しい学校の形について考えようと思うきっかけになった。2月の発表会も楽しみにしています」「受検に対して不安と焦りで気持ちが落ち着かない日々でしたが、今日参加させてもらい少し心が軽くなったような気がする。合格を目指して頑張ろうと改めて思う事ができた」「不登校だった子たちが、辛く悩んでいた時期を乗り越え、フィンランドまで行って楽しそうにしている姿を見て、感動した」「他国の教育現場を見学し、素晴らしいと思った。日本の教育はまだまだ古風で昔ながらの校則も多く、周りと違っていいのだと気づきにくいような気がするが、北斗高校は生徒の個性を受けとめ、伸ばしてくれるので、生徒がいきいきとしているように感じる」といった感想が寄せられた。



### (2) サタデーフォーラムでの報告

1月15日(木)本校生徒と教職員を対象に、報告会(50分間)を実施した。フィンランドで学んだことを動画やスライドを用いて説明した。終了後には、webフォーム入力により振り返りの記入を求めた。参加生徒からは、「海外のことを全然知らなかったのが、初めて知ることがあっておもしろかった」「フィンランドは、子どもから大人まで誰一人として取り残されず、生き生きと過ごしやすい環境で、世界で一番幸福な国と言われているのが理解できた」「本国の人にインタビューした時、法律や教育に関する嫌な点がなかったことに私も驚いた。お金のことを気にせず学べるという点はとても素晴らしいと思っ

た」「自分の高校を代表した6人の方達がとても誇らしい」「学校では先生に言われたことをするだけでなく、自分たちで考えて行動することが大切にされていると知り、そうした環境があるからこそ、安心して自分らしくいられる人が多いのだと感じた」といった多数の感想が寄せられた。



### (3) シンポジウムでの報告

探究活動から得た学びを、広く県民に還元することを目的とし、2月21日（土）に「子どもたちの居場所と学びについて考える」シンポジウムを青森県観光物産館アスパムで開催した。

第1部では、フィンランドでのフィールドワーク報告（55分）、第2部では、パネルディスカッション（50分）を行った。途中、現地でお世話になったコーディネーター3名にご協力いただき、オンラインで接続した。

参加者からは、「日本の定時制高校のことを知れてよかった」「生徒達が自分の言葉で自分の変化やこれからについて語る姿を見てとても勇気をもらった」「フィンランドでの探究活動がよく分かる内容で非常に分かりやすくまとめられていた。個人的には、第2部のパネルディスカッションでの生徒さんの「生」の声（言葉）がとても印象に残った」「高校生の視点から発信されることに、大きな意味を感じた。外を知ることで内を理解する、自分の環境を見つめ直すという学びが発表の随所から伝わってきた」「北斗七星チームのような、教育を探究する生徒・当事者が、国や自治体に直接考えを訴えられる機会ができればいいなと思った」といった感想が多数寄せられた。

シンポジウムを終えて、「教育や不登校などに興味があって聞きに来てくださったと思うので、こんなにも多くの人に関心を示してくださっているのだな

青森県立北斗高等学校 チーム北斗七星

子どもたちの  
居場所と学びについて考える

参加方法  
対面 100名  
オンライン

入場  
無料

フィンランドに学ぶ青森県の未来  
～自立と個性を育む学びと安心できる居場所づくり～

Keyword 不登校、居場所づくり、自律した学び  
インクルーシブ、ウェルビーイング

日時 2026年2月21日（土）  
13:20～15:30（受付13:00）

場所 青森県観光物産館 アスパム  
6階 八甲田

内容 1部 フィンランドでの探究報告  
2部 パネルディスカッション  
チームメンバー×参加者との対話

お問い合わせ先  
青森県立北斗高等学校 定時制の課程  
フィールドワーク報告実行委員会 電話 017-734-4464



詳細は、本校ホームページへ  
北斗高校

と責任を改めて感じた」「保護者などの周囲が対応・理解することが大切だと自分の過去を通して感じる。そのためサタデースクールを中学生未満の参加日もつくってみてはどうか。また、市内の不登校等特認校を訪問し、小学生や中学生と話をしてみたいとも思う。さらには、この北斗七星みんな不登校の保護者の会のようなものに出て、もっと話してみたい」「サタデースクールを教育関係者はじめ保護者、県民にもっと広げ、子ども理解につなげるきっかけにしたい」「ユースセンターのようなサードプレイスを青森にも作りたい」「定時制での学びを周知したい」といった、今後の活動についても改めて考えた。


## 7 まとめ



### フィンランドの教育の考え方


- ・生徒一人一人を大切にしている 
- ・成績以上に成長を大切にしている
- ・自己決定を大切にしている 

### 先生の役割

- ・生徒一人一人の健康を大切にする
- ・成績(点数)のみで評価をしない 
- ・学びは生徒主体
- ・必要なサポートは行う
- ・強制やプレッシャーが少ない教育

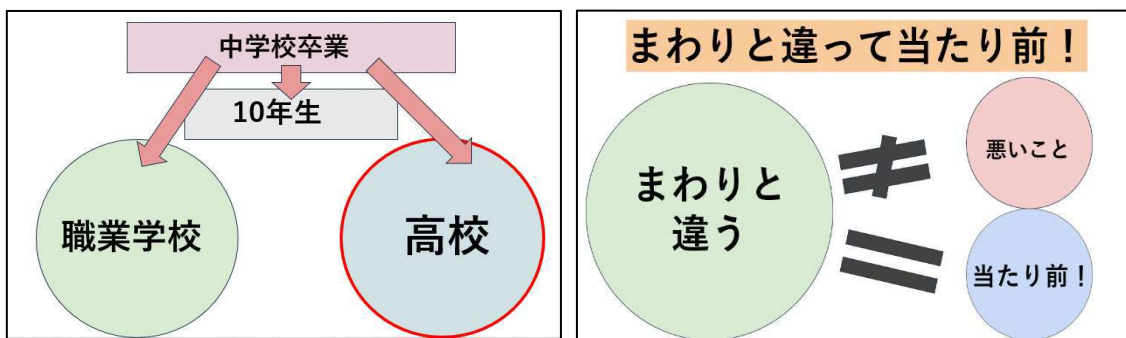
安心できる環境づくり

### 生徒を支える専門スタッフ

- ・スクールソーシャルワーカー(SSW)
  - ・特別支援教員
  - ・特別教育クラス教員
  - ・学生カウンセラー
  - ・心理士
  - ・スクールナース
  - ・医師
  - ・ユースワーカー
- 

学ぶことで選択肢が広がり、  
自分の世界が広がる

国として平等・公平を掲げ、国籍も年齢も関係なく学べる環境が確保され、  
生涯学ぶことを大切にしている



フィンランドのフィールドワークで特に印象に残ったことについて3点挙げる。

1点目は、「まわりと一緒にじゃなくていい」という点である。フィンランドでは、高校を卒業する年限について、生徒が自らの卒業時期を3年、3年半、あるいは4年と自由に選ぶことができる。

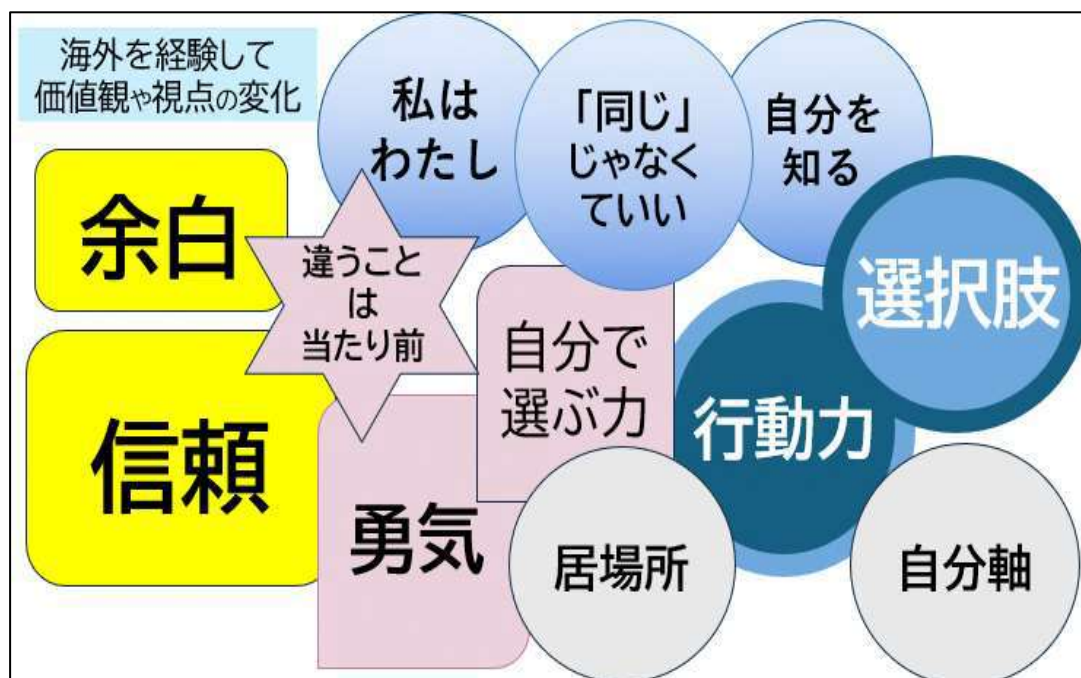
日本では3年での高校卒業が当たり前であり、3年で高校卒業できないとどうしても世間からはネガティブな印象をもたれがちだが、フィンランドでは3年で高校を卒業するのも、3年以上時間をかけて高校を卒業するのもどちらも当たり前であり、時間の使い方の違いは単なる「選択の一つ」に過ぎない。また、10年生の制度を利用した「遅れての入学」も一般的である。フィンランドでは他の人と違うことが「異常」ではなく、多様な「当たり前」の一つとして受容されていることを強く感じた。制度は国によって違うが、まわりと同じであることを強く求められがちな日本社会においても、このような「個を尊重」する風潮が浸透することで、一人一人が生きやすくなるのではないかと強く感じた。

2点目は、体制についてである。この柔軟な選択を支えているのは、充実したサポート体制が整っているからである。フィンランドの教育全体に感じたことだが、フィンランドの教育は多くの選択肢があり、選択肢の一つ一つが誰かにぴったり適応する、寄り添っている選択肢であると思った。悩むことも多いと思われるが、その悩みをサポートする取り組みがしっかりしていた。進路相談では、学校の先生ではなくキャリアカウンセラーと一対一で行うそうだ。このような制度があるからこそ、子どもたちが数多くの選択肢の中から自分の道を安心して選択できるのだと思われる。

3点目は、子どもたちにかかわる多様な立場のスタッフの存在である。大人がどう子どもにかかわるかが重要である。日本では、先生の仕事は多忙なイメージが根付き、なり手が不足している状況もある。先生たちの働き方に余白時間が必要であり、児童生徒とじっくり向き合えるようにしていく必要があると考える。

## 8 参加者の変化と成長

今回、初めての海外を経験し、さまざまな価値観や視点の変化、成長を実感している。メンバーが個々に感じた変化を1人2つのキーワードで表現した。



## 9 おわりに

本探究活動は、子どもたちの「自立と個性をはぐくむ学び」の推進や「安全な居場所づくり」を拡充すること、「生徒自治の活性化」に向けて示唆を得ること、自身のこれからのあり方や生き方について具体的に考え行動することを目的とし、探究活動を行った。

フィールドワークを経験し、改めてこれまでの自身を振り返ると、当時は苦しみや葛藤などいろんな出来事があったが、「無駄なことはひとつもなく、意味があった」と前向きに捉えることができている。また、不登校経験のある6人がチームを組み、活動できたことこそが、私たちにとっての「安心できる居場所」となり、貴重な経験をすることができた。サタデースクールをはじめとした諸活動では、さまざまな事前の準備や発表等、思うようにうまくできずに諦めたくなることもあったが、担当教員を含めた7人で活動できたことが支えとなった。

これからもチームメンバーのみならず、本校生徒有志が力を合わせ、あおもりの未来を担う子どもたちのために、サタデースクールなどの居場所づくり事業をとおして、私たちにできることを模索し、活動を続けていきたい。

## 謝辞

今回、プログラム実施にあたりご尽力いただいたエコ・コンシヤス・ジャパン代表の戸沼如恵様、現地コーディネーターとして温かく迎え入れてくださった、森山奈保美様、ヒルトゥネン久美子様、杉山美咲様に厚くお礼申し上げます。

本事業をご担当いただき、私たちのために並々ならぬお力添えくださった青森県交通・地域社会部 地域交通・連携課 人づくりグループの皆様、ならびに JTB 青森支店の皆様には、感謝いたします。

本校の取り組みを年間通じて追い続け、広く発信してくださった東奥日報社の工藤様、いつも温かい応援をありがとうございました。

あわせて、私たちの活動を親身に見守ってくださった風張教育長、坂上教育次長、そして学校でさまざま後押しくださった中山校長先生、幸山教頭先生、長野教頭先生はじめとする先生方の手厚いサポートと励ましがあつたからこそ、私たちは探究活動に打ち込むことができました。たくさんのサポートと励ましをくださり本当にありがとうございました。

一緒に活動を盛り上げてくれた北斗高校生の皆さん、本校の教育活動を支えてくださるすべての皆様に感謝申し上げます。

最後に、このような貴重な機会をくださった宮下青森県知事をはじめとする県職員の皆様、県民の皆様に深く感謝の意を表します。

## 参考引用文献

青森市教育委員会（2024）令和6年度不登校児童生徒への支援 校内教育支援センター設置マニュアル.

[https://www.city.aomori.aomori.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page/001/007/667/bunkyo-060820-02-07-02.pdf](https://www.city.aomori.aomori.jp/_res/projects/default_project/_page/001/007/667/bunkyo-060820-02-07-02.pdf)

青森市教育委員会（2025）一人一人の夢・志・挑戦を支援するための特認校（不登校等特認校）配布資料2. 青森市教育委員会.

[https://www.city.aomori.aomori.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page/001/008/405/bunkyo-070121-01-06-02.pdf](https://www.city.aomori.aomori.jp/_res/projects/default_project/_page/001/008/405/bunkyo-070121-01-06-02.pdf)

ヒルトゥネン久美子（2025）北斗高校フィールドワーク資料

金澤拓紀（2024）不登校の中学生およびその保護者に対する定時制・通信制高校の取組～「北斗サタデースクール」「北斗サタデーフォーラム」を通じて. 特別支援教育研究 No. 802. 東洋館出版社.

神山努・涌井恵（2020）フィンランドにおける特別なニーズのある子どもに対する教育. 発達障害研究 42. p145 - 152. 日本発達障害学会.

小林湧 (2025) Be the Player—すべての子どもがプレイヤーであることを目指して  
LD ADHD&ASD10月号. 明治図書印刷株式会社.

こどもたちの幸せを考えるラウンドテーブル/青森教育改革有識者会議 (2024)

<https://aomori-pref.note.jp/n/n00455918e8d6>

幸山敏克 (2025) サタデースクール—不登校の中学生への支援—LD ADHD&ASD10月号.  
明治図書印刷株式会社.

森山奈保美 (2025) 北斗高校ヘルシンキツアー資料

大谷杏 (2022) フィンランドの職業学校の現況と成人教育との関わり—北部地域での  
現地調査結果より—福知山公立大学研究紀要.

先生の学校 (2023) フィンランドのインクルーシブ教育

<https://www.sensei-no-gakkou.com/article/no0076/>